

# 令和2年度オオオニバス栽培記録

平井健一郎

当園の熱帯スイレン温室内ではオオオニバス *Victoria amazonica*、パラグアイオニバス *V. cruziana*、ロングウッドオオオニバス *V. Longwood Hybrid* の3種を栽培管理、展示している。例年8月に開催するオオオニバス試乗体験会は、酷暑の来園者閑散期に集客する目玉のイベントのひとつである。このイベントに向け育成している当該植物管理について、長年そのノウハウを培ってきた。

今年度は梅雨（6月10日梅雨入り）が1か月半の長期に渡り、7月30日の梅雨明けまで、過去6番目に遅く（気象庁）オオオニバスの生育にとって日照不足が影響すると考えられたにもかかわらず、当該植物の葉が近年になく大きく育った（表、図参照）ことから、今年度の栽培管理についてその概要を記録するものである。

## ①実生苗の育成

交配・採種した種子をサンプル瓶に入れ、水を張ったバケツ中に沈め熱帯スイレン温室又は大温室の日蔭で保管していた。3月中旬～4月、サンプル瓶中で発根した実生苗を取り出し、田土を充填した2～3号スリット鉢に3～5本植え付け、タニシの食害を防ぐべく網戸資材で囲った水を入れたバケツ内で出芽するよう養成した。出芽し本葉の伸長が見られたら1株鉢として先述の用土で3号スリット鉢に鉢上げし、4月上旬から2週間に一回固形の油粕を育成鉢の大きさに応じて3号鉢＝大1個、5号鉢＝大2個、7号鉢＝大3個（東商 骨粉入発酵油粕大粒）を施肥した。

水中葉から本葉が伸長・展開するにしたがって、水深を深く調整（14→24 cm）し、根が伸長してポット下部から出たら、生育が滞ることが無いよう速やかに（生育最盛期には1週間で）鉢増しした。こうして5月中に、7号鉢まで順次鉢増しした。

また一方で、未発芽で既存保存中の種子を入れたサンプル瓶は従来からプラスチック製の蓋により密閉状態であった。蓋を開けるとアンモニア臭がし、瓶中で発芽・発根しても低酸素状態で腐敗・溶解していた。そこで網戸資材を活用し、水交換できるよ

う全て取り替えた。

## ②植栽柵の準備

定植用実生苗を育成中、植え付け予定の植栽柵 1.75×1.75m×0.6mの準備を下記の要領で5月下旬に行った。

- 1) 作業を容易にすべくあらかじめ植栽柵中の土壌表面と同程度まで水位を下げた。
- 2) 昨年まで旧株が植えてあった中心部分を中心に古い土壌を土袋（18ℓ）5袋分と根等の植物残渣を取り除いた。
- 3) 植栽柵四隅深部を還元層ができないよう天地返しするとともに、下記の資材を投入した。

ア 田土（購入、納品後園内で未使用のもの）6袋分

イ 元肥としてペレックス2号8-8-8 約500g

ウ 土壌改良材としてカルエース 約750g

- 4) 上記投入資材に偏りが無いよう十分混和した。
- 5) 先の栽培管理において、植栽柵いっぱいまで土壌を入れても下部は還元層となり、生育土壌として有効に活用されていなかったことが観察されたことから、植栽柵を満たすまで土壌は投入せず、昨年同様7～8分目程度とした。

## ③植え付け

最大7号スリット鉢まで順次鉢上げした株から、葉縁が立ち上がり勢いよく新葉が展開し、スリット鉢底の観察から根の伸長も著しい株を定植株に適したものとして選択した。6月初めに3種それぞれ定植した。いずれの定植株も本葉が展開していたが、*V. amazonica* 以外は水没した状態であった。*V. cruziana* は速やかに水面に本葉を展開させたが、*V. Longwood Hybrid* の苗は最も小さく、完全に植物体全体が水没し、程度が甚大だったためか枯死した。生育がよい次点株が十分な大きさになるのを待って、再度正面植栽柵に6月中旬定植した。

## ④栽培管理（表）

毎月2回月初めと中旬に固形の油粕（実生苗の育成と同品）を株の大きさに応じて最大40個植栽木枠沿いの植栽柵最深部に施肥した。

オオオニバスの展葉に伴い周辺の熱帯スイレンと干渉したことから熱帯スイレン植栽柵を移動もしくは株を移植して、オオオニバスの葉の展開・伸長に干渉しないよう配慮した。

表 *Victoria* 3種の最大葉身長

調査日	種					
	<i>Victoria amazonica</i>		<i>Victoria cruziana</i>		<i>Victoria Longwood Hybrid</i>	
	最大葉身(cm) *	葉数	最大葉身(cm) *	葉数	最大葉身(cm) *	葉数
6/25			143×13	2		
7/5			146×140×14	3	150×144	1
7/6	112×124	3	147×143×14	4	126×135×3	2
7/12	134×148	2	154×152×15	6	153×163×5	3
7/14	132×146	2	157×151×15	6	170×173×8	3
7/19	144×149	3	159×152×15	7	178×182×9.5	4
7/27	148×150×3	4	163×145×15.5	9	178×184×7	5
8/3	147×155×4	5	161×154×14.5	11	181×180×9	6
8/11	148×158×5	6			185×180×11	8
8/12			161×153×15	16	173**	
8/15					185**	
8/16					178**	
8/18					181**	
8/26	153×152×5	6	146×134×15.5	130	184×178×11	9

\*: 図中a+bの最大値を最大葉身とした

\*\* : 試乗会で使用した葉身長

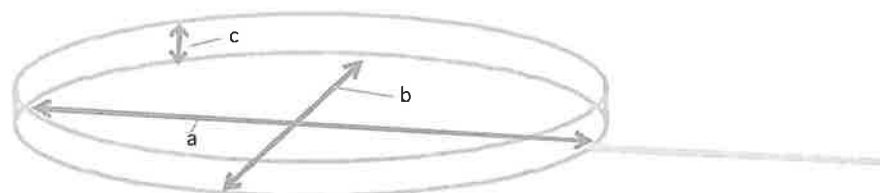


図 *Victoria* 計測箇所  
a×b×c

中心から展開する新葉が先に展開した葉と干渉した場合は、外側の古い葉を取り除き、伸長するスペースを広げた。8月初めには、切り除くには早すぎると思われる若く健全な葉が増えてきたことから、葉が干渉しにくいよう池の水位を上げ葉柄の伸長を促した。

また、蕾も試乗体験会までは確認しだい切り取った。

### ⑤交配・採種

試乗体験会終了後8月23日から次年度の株確保・育成のため採種に取り組んだ。*Victoria cruziana* と *V. amazonica* の両者の開花するタイミングに合わせて自殖や交雑を行った。例年 *V. cruziana* は9月いっぱいまで花が止まっていた。今年度は12月に入っても花は矮小であるが未だ開花している。植栽柵の土壌表面を観察すると非常に膨軟で表内の面を触ると多くの気泡が含まれていた。*V. amazonica*、*V. Longwood Hybrid* いずれの植栽柵でも同様な気泡が見られることから、植栽柵土壌内部が好気状態に保たれ、根の代謝も未だ活発であることが伺える。

約1か月で果実の肥大、着色が確認され、花柄が自然に溶解し果実が分離するのを待って回収した。自殖については人為的に交配を行う必要はなく、開花第一日目に採種用のネットを掛けておけば十分量採種することができた。

### 所見

過去の栽培管理では、十分な日照の確保が生育を左右する要点と思われてきたが、今年度の梅雨の状況を鑑みると、定植後の *Victoria* 属の育成は必ずしも日照量で決定されるものではなく、栽培技術で安定したオオオニバ

ス育成の可能性が考えられる。

については、今年度の栽培管理の概要を以下に記す。

- ①実生苗の育成では、スリット鉢底から根が出たのを確認したら即鉢増しし、株の成長が滞り老化しないよう健全な育成に努めた。
- ②植え付ける植栽柵いっぱいまで土壌を充填することなく7~8割程度とし、土層を浅くして植栽柵土壌を最大限有効活用できるよう、深層まで耕耘した。
- ③交配作業では植栽柵中に極力踏み込まないように配慮した。また、施肥の際は植栽柵最深部へ施すべく小シャベルで2回/月埋設した。
- ④試乗会に利用した葉はいずれもロングウッドオオオニバス *V. Longwood Hybrid* であった。この株は当園が従来保有していた *V. cruziana* と *V. amazonica* の2019年9月22日に交雑したF1雑種であることから、雑種強勢による優良株であったとも考えられる。